長特研だより 第106号

発　行:長崎県特別支援教育研究会
事務局:長崎県立川棚特別支援学校
編集校:長崎県立島原特別支援学校
発行日 平成29年9月29日

《第２８回長崎県特別支援教育研究会 総会及び研究大会報告》

本年度の大会は８月２日（水）に諫早文化会館をメイン会場に県内各地からたくさんの参加をいただき、盛大に行うことができました。本号では、簡単ではありますが、総会、講演、五つの分科会の発表・協議・指導助言の内容等を報告いたします。

総会報告　開会行事の後、総会が行われました。

＜議案＞　①平成 28 年度事業報告
②平成 28 年度会計報告・監査報告
③会則について
④平成 29 年度役員紹介
⑤平成 29 年度事業計画（案）
⑥平成 29 年度予算（案）

以上の議題が審議、承認されました。

講　演

演　題　「特別支援教育におけるキャリア教育と主体的・対話的で深い学び 」

講　師　独立行政法人国立特別支援教育総合研究所
研修事業部　主任研究員　清水　潤　先生

（1）特別支援教育におけるキャリア発達

キャリア発達とは「自分らしい生き方を実現すること」であり、子どもたちが働き続けたい、学び続けたいという強い思いをもつことが大切だ。キャリア発達の場面は学校生活の中にちりばめられている。教師はその場面を見つけてつなげていくことが重要であり、それが子どもたちにとってキャリア発達の基盤になる。

キャリア教育は、理念と方向性である。特別支援学校学習指導要領の改訂において、「学びの連続性を重視した指導、一人一人に応じた教育の充実」、「自立と社会参加に向けた教育の充実」、「幼小中からのキャリア教育」が明記された。小中学部の学習指導要領にはキャリア教育が位置づけられており、幼稚部に関しては“幼児期の終わりまでに育ててほしい姿１０点”としてキャリアの観点で打ち出されたものがある。これまで、キャリア教育は中学部、高等部が中心だと思われがちだった。今後は、実践を通して、幼小中高の全体でキャリア教育を推進していると意識してもらいたい。

（2）特別支援教育における主体的・対話的で深い学び

「主体的・対話的で深い学び」の実現とは、人間の生涯にわたって続く「学び」という営みの本質を捉えながら、教員が教えることにしっかりと関わり、学びの在り方を絶え間なく考え、授業の工夫・改善を重ねていくことである。「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」が実現できているかという視点に立った授業改善を行うことが

重要である。また、これら三つの視点は単元・題材のまとまりの中で実現されるものである。

障害のために思考し、判断し、表現することへの困難さのある子どもたちについても、障害の状態等に留意して、「主体的・対話的で深い学び」を実現することを目指し、困難に対応しながら学びの過程の質的改善を行うことが求められる。

（3）学習指導要領改訂の方向性

【資質・能力の三つの柱】

①生きて働く知識・技能の習得

②未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成

③学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養

特別支援学校の子どもにとって、②思考力・判断力・表現力は苦手な部分であるため、大事に育てたい。③主体的に学習に向かう態度を含めた学びを、人生や社会に生かそうとする力である。

【社会に開かれた教育課程】

社会や世界の状況を視野に入れ、よりよい学校教育を通じて社会を創るという目標をもち、教育課程を介してその目標を社会と共有していく。学校教育の目指すところを社会と共有・連携しながら実現させることが大切である。

【学習指導要領等の枠組みの見直し】

「子ども一人一人の発達をどのように支援するか」について、すべての学校教育で大切にしていくこととなった。特別支援教育が発信していく役割は非常に大きい。

第１分科会（小学校における特別支援教育）

「コミュニケーション力の向上を目指して」～実態に応じた指導の取組～

発表者：佐世保市立皆瀬小学校　教　諭　髙木　安子

助言者：長崎県教育庁特別支援教育室　課長補佐（兼主任指導主事）

近藤　亮二

１　発表の概要

〇テーマ設定の理由

〇指導・支援の実際

・体づくり（生活動作や好きな遊びを通して）

・給食指導（偏食指導）

・環境の調整（交流学習を通して）

・コミュニケーション力の向上（言葉でのやり取り）

〇成果

・コミュニケーション力の向上

・音韻認識力の向上と発音の明瞭化

・援助要求スキルの獲得

〇まとめと今後の方向

２　質疑応答・研究協議の概要

〇質疑応答

・学校以外での食事の様子について

・保護者との連絡帳の形式について（連携のとり方）
・医療、訓練機関とのつながりについて
・交流学級や知的障害の特別支援学級との交流内容について
・時間割や教育課程(詳細な時数)について
・言葉の指導について
・担任不在時の校内支援体制のあり方について

〇研究協議
・不適応な行動に対する具体的な指導について

3　指導助言の内容

〇髙木先生の実践発表について

＜良かった点＞
・児童の実態と指導内容をこまめにまとめられていた。
・児童の言葉への指導が非常に細やかだった。
・「ほめる」といった行動を担任以外の教員も共通理解をして行っていた。
・実践を通して成功体験を積ませていた。

＜気を付ける点＞
・教師の反応を楽しむといった誤学習が見られる場合は、前後の行動を見て何があったのか状況を把握することが大切である。周囲の環境や人的な要因も含めて見てほしい。
・実態把握をする際、できないことではなく「何をどこまでできるのか」「どう支援したらできるのか」を詳しく明記することが大切である。引き継ぎ資料にもなる。
・領域・教科を合わせた指導においても、国語や算数等のねらいが入っていなければならない。学習指導要領のどこからきているのかをきちんと理解して説明できなければならない。

〇新学習指導要領について
・何ができるようになるのかの観点で育成を目指す。
・個別の指導計画、個別の教育支援計画を作成するときの手立てとして、それぞれの子どもがどのように学ぶのかを明記すること。作成が義務化されていくため、教師の主観だけでなく、数値化したり手立てを詳しく明記したりして客観的な視点も入れて作成すること。

第２分科会（中学校における特別支援教育）
「自己表現力を高める自立活動」～あおぞら学級での取り組み～
発表者：佐世保市立江迎中学校　教　諭　中村　美保子
助言者：長崎大学大学院教育学研究科　准教授　友永　光幸

1　発表の概要

〇実践内容へ至るまでの指導の組み立て
・各教科の職員と連携した、継続性のある学習指導
・障害特性を自覚し、課題に取り組める環境づくり
・一人一人の個性を生かした、学級組織づくり
・国語の授業と関連した、自己表現力を高める学習及び自立活動

○今後の活動の取り組み

・協同的な学びへつなげる（役割分担や話合い活動）

・「できた」という達成感を進路に生かす

・コミュニケーション能力を高める

・人間性を高める（互いの良さを認め合う、思いやり）

2　質疑応答・研究協議の概要

○質疑応答

・時間割「生単」の分けられたねらいについて

・文章を書く上での成果について

・「聞く」ことの指導の工夫について

・国語科と連携した自立活動の取り組みについて

・作業的な内容を取り入れた授業について

・学校全体で取り組み始めた「華道」の経緯について

・読み聞かせの発表でのアプローチの仕方や苦労点について

・交流学級でのノートテイクの向上について

○研究協議

・テーマ①集中力を持続させるための工夫

・テーマ②コミュニケーションの力をつけるための取り組み

3　指導助言の内容

○中村教諭の発表について

・知的障害のある生徒に対して、学びの特性を踏まえていろいろな取り組みがあり、きちんと成果を上げていた。

・知識・技能が断片化され、実際の場面で応用が難しいことがあるため、話す必要性、書く必要性のある。実際的な状況が必要だが、その点が押さえられていた。

・繰り返し行うことは重要だが、ただ繰り返してできるものではない。出来具合を押さえ、その段階に応じた手立てが必要である。

・成功体験の少なさによる意欲の低さが見られる。興味関心に応じた課題を設定し、「できて終わり」を心掛け意欲を伸ばしていきたい。

・生徒が教えられる側ではなく、学び取っていく主体者になっていた。あおぞらコーポレーション、ボールペン習字、読み聞かせなど、努力が認められることでまた主体的に学び取っていくようになる。そのためにも、主体者になるための仕掛け作りが重要である。基になるのは、チャレンジしたい主体性を生む学級作りを基本において指導に取り組んだ成果であろう。

・障害特性により学びの特性も異なる。自閉症の子どもは場の状況から学びにくいため、ボールペン習字の（書き直しができないが）間違えるのが嫌な生徒に対してはどうだろうか。感情を込めて朗読する活動は、他者の感情や場の空気を理解しにくい自閉症の子どもには違うアプローチが必要になる場合もある。

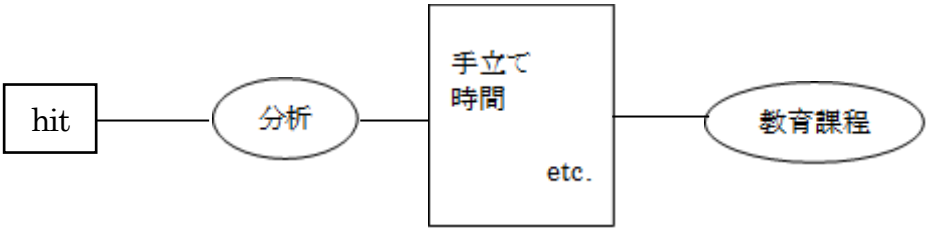
○生徒の教育的ニーズについて

・核になる部分（教育課程）は、必ずやらなければならないことである。その外側に学校独自で行う部分、さらに外側に特別支援学級として行う部分があり、それを考えていけば教育的ニーズに近づいていくのではないか。

・ヒットアクティビティ（ヒットした活動）を貯めていき、何が良かったのかを分析していく。例えばすごろ

くトーキングなどの活動は楽しいだけでなく、話のテーマが残っているので、読むことができれば見直すことができ、活動の何が良かったのかを分析してみるとよい。そして最終的に教育課程に生かしていくために、手立てや何時間くらい取り組むかということを考えていくとよい

。



・学習指導要領に示された基本の枠組みをきちんと押さえる必要がある。自由に教育課程を組み立てていいのではない。まず①枠組みがあり、②ニーズに近づけていく段取りの順でなければ、真に学ぶべき部分が抜け落ちている可能性がある。学習指導要領で小中高の段階が見えてくるので、複数の教師が関わる場合、基本の枠組みがないと、何をしていいか分からないことがある。ハードルが高いと感じる先生もいるかもしれないが、求めるべきレベルはここだということを押さえておきたい。

第３分科会（特別支援学校：教科別の指導）

「社会科、理科の教科別の指導について」～生活単元学習から教科別の指導へ～

発表者：長崎県立島原特別支援学校　教諭　貝本 智和

助言者：独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

研修事業部主任研究員　清水　潤

1　発表の概要

〇本校高等部の教育課程について

〇知的教科と生活単元学習の捉えについて

〇社会科、理科における指導計画と指導の実際

〇実践を通しての気付きと今後の課題

・単元の系統性や実施時期の検討

・個人差に対応した学習グループの編成

・生徒の実態や学びやすさを考慮し、教科別、教科等を合わせた指導のどちらの指導形態で実施するかの検討

・卒業後の生活に結び付く指導内容の精選と具体的・体験的な指導

2　質疑応答・研究協議の概要

〇目標設定や評価の仕方について

〇特別支援学級からの入学者の理科、社会科の履修状況について

〇生活単元学習と理科、社会科の関連性について

〇各校の現状報告

・社会科、理科の指導内容を取り扱う指導形態について

・指導内容の選定、単元の組み方について　等

3　指導助言の内容

〇発表について

・基本的対応１０のポイントが挙げられていた。学習指導要領にまとめられている内容をしっかりと掘り下げて解釈する必要がある。

・教育課程における学びの連続性の視点に関して、中学校の特別支援学級からの生徒だけでなく、特別支援学校中学部の子どもたちについても触れてほしかった。特別支援学級や中学部での学びの履歴、どの内容が何につながっていくのかなど、教育課程と照らしながら説明があると良かった。また、学習上の特性、教育的な対応の基本を基に課題解決をしていこうとする姿勢が見えて良かった。

〇教科別の指導、各教科等を合わせた指導とその関係について

・知的障害を持つ児童生徒の教科の指導は生活に活かすということはあるが、教科で一つ一つに焦点が当たるため、断片的になりやすい。各教科等を合わせた指導の中では、様々な教科等を結果的に必然的に学ぶことができる。知識・技能が断片的であるということが、各教科等を合わせた指導に関係してくると思う。

・教育的対応の基本的な考え方のうち、「生徒が自ら見通しをもって行動できるよう、日課や学習環境などを分かりやすくし、規則的でまとまりのある学校生活が送れるようにする」は、各教科等を合わせた指導の必要性に関係してくる。

・生活単元学習の単元が社会科や理科とその時期で関連していれば、社会・理科を設定した意味合いはある。生活単元学習だけで学習効果を上げることは難しいので、焦点化して簡潔な学びをしておくことで、生活単元学習での学習に活かされていく。カリキュラムマネジメントの中で、「各教科等の教育的内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと」と示されている。教育課程の中で、関連を考えていくことが大事になってくる。

〇カリキュラムマネジメントについて～学校教育目標を踏まえて～

・学校教育目標を受けて、それぞれの学部目標がつながっているか、具体化されているか、小中高の目標の系統性は保たれているかということが分かれ道になる。小学部の児童が高等部を卒業するまでの１２年間の学びでその段階にふさわしい教育課程を軸に考えると、学校として一本筋が入る。途中で他校から多く入ってくる場合はその生徒に合うのか、工夫した方がよいのか、その学部の特色として考える。今回は高等部のことで提案があったが、学校として考えていくことが大事だと思う。

第４分科会（特別支援学校：教科等を合わせた指導）

テーマ「将来の自立と社会参加を目指した日常生活の指導」

～朝の係活動や着替えでの取組を通して～（小中学部）

～ホームルームにおける一日の振り返りを通して～（高等部）

発表者：長崎県立佐世保特別支援学校　教　諭　藤村 美里

教　諭　古藤 真之祐

助言者：長崎県立虹の原特別支援学校　副校長　平田 昭輔

1　実践発表

〇小中学部の事例発表

〇高等部の事例発表

2　質疑応答・研究協議の概要

〇質疑応答

・特定の教師へこだわる生徒への指導について
・教室の整備について変えた部分と整備後のＡさんの変容について
・Ｂさんのチェックリストでの△の意図と△の評価におけるＢさんの理解

〇研究協議

・日常生活の場面以外で、Ａさんの自発性や主体性が見られた場面
・家庭との連携
・６年生の段階で作業服の着脱以外に取り組むべき日常生活の動作
・チェックシートの活用について
・学部間の引継ぎについて

３　指導助言

<小中学部の取組>

〇朝の活動を通して
・活動の流れを覚え、一人でできるようになるまで、教師が一緒に取り組む。
・教師からの称賛による意欲や自己肯定感の向上が見られた。
・情緒や対人関係が安定した。

〇制服の着脱に向けて
・登校後、着替えの部屋へ移動するまでは、見守る。→小中の引き継ぎ
・国語や数学、自立活動等の時間にも、手指の動きに関する学習を行う。

<高等部の取組>

・セルフマネジメントスキルの向上を目指した指導を行った。
・具体的な指示（始めと終わり）を意識した。
・進路先への確実な引き継ぎ

<将来の自立と社会参加に向けて＞

〇日々繰り返される日常生活の指導
・自分の生活に関わる様々な事項に自分で取り組む。
・他者との関わりを通して、遂行することで達成感を高める。
・「役割」と「決まり」等の価値観を形成していく。

→キャリア形成の土台作り

〇各教科等を合わせた指導の一つ
・生活科を中心に、広範囲の各教科の内容が取り扱われる。
（生活科（小学部）→職業・家庭科（中学部）→職業科（高等部））
・生活年齢や青年期の課題、自尊感情等に留意する。

→「育てたい力」を明確にし、教育課程全体で関連付ける

〇「日常生活の指導」の一層の充実を図るためのポイント
・実態把握が大切、個に応じて柔軟に指導・支援
・指導内容及び指導方法を学校全体で共有し、組織的に指導・支援
・自分から「できる」状況づくりを設定し、他者との経験の中で、認められる経験を積み重ねていく。
・社会生活や職業生活への引き継ぎや、保護者や事業所と連携し般化につなげる。
・ＩＣＴの活用を工夫する。

第５分科会（特別支援学校：特別支援教育）

「本校の自立活動の取り組みとキャリア教育の視点を踏まえた授業実践」

発表者：長崎県立虹の原特別支援学校　教　諭　徳永　剛

教　諭　古香　亮一

助言者：長崎県立諫早特別支援学校　教　頭　田中　昭二

1　発表の概要

〇本校中学部の自立活動の取り組み

・教育課程について説明

・自立活動チェックリストを活用した目標設定

・目標設定シートの活用

・課題関連図を活用した年間目標設定

・「時間における指導」と「教育活動全体を通じた指導」

・外部専門家の指導助言を参考にした自立活動検討会

〇キャリア教育の視点を踏まえた授業実践

・キャリア教育全体計画

・キャリア教育と自立活動の関連

・キャリア発達の般化

2　質疑応答・研究協議の概要

〇質疑応答

・個別の教育支援計画の目標と自立活動の関連性について

・自立活動チェックリストの評価基準について

・目標設定に関わる教員数について

・キャリア教育の視点を取り入れた授業づくりについて

〇研究協議

・自立活動の目標設定、指導内容設定、グループ編成から実際の指導までの手続きについて

・他校の取り組みについて

3　指導助言の内容

〇中教審答申「自立活動の充実」について

・キャリア教育の視点を取り入れた、評価方法の工夫

〇目標設定までの手続きについて

・自立活動チェックリストを複数回つけるなどの工夫が必要である。また、グループがいいのか、個人がいいのかは、それぞれ検討が必要である。

〇自立活動の組織的な取組について

・職員へ向けたアンケートを集計することで、どこに焦点を当てればよいか（どこに課題があるか）が分かるのが良いことである。

〇キャリア教育について

・キャリアには、「ワークキャリア」と「ライフキャリア」がある。キャリア教育は、教育活動全体を通してキャリア発達を促す教育である。

〇虹の原特別支援学校のキャリア教育について

・育てたい力について、キャリア教育全体計画を策定し、各学部で育てたい力を設定している。

〇「般化」について

・まずは、大人と子どもの関係がしっかり作られていることが重要である。その関わりの中から自己肯定感が高まってくる。取り組む課題は、簡単でもなく、難しくもなく適度な課題が必要である。人の関係や場面が広がってきたときの評価のずれがないようにする。（共通した働き掛けや評価の視点）

〇主体的・対話的で深い学びの実現（授業改善の視点）について

・学びへの興味や関心の喚起ができているか、振り返りを大切にする。

・子どもの経験を生かして、関わりの中で授業ができているか。

・子どもの力を生かした授業になっているか。

《 平成２９年度秋季研修会の案内 》

日　時：平成２９年１０月１８日（水）　１４：４５～１６：４５（受付：１４：００～）

会　場：東彼杵町総合会館

演　題：「困り感を持つ児童・生徒への支援」～学校現場における重層的な支援体制とは～

講　師：西九州大学　子ども学部心理カウンセリング学科長　　教授　西村喜文　先生

※　実施要項及び申し込み用紙は、川棚特別支援学校ホームページに掲載しています。